

大城ひかるのベトナム通信



通信

- 1 -

シンチャオ (Xin chào) おきなわ



車・バイク・歩行者が入り乱れるホーチミンの出勤風景 (筆者撮影)

建設業界の皆さま、「初めまして」の方々も「久しぶりです」の方々もいらつしやると思いますが、3年前まで株式会社沖縄建設新聞出版事業部に勤務しておりました大

城といいます。在籍当時は皆さまに本当にお世話になりました。改めてまして御礼申し上げます。現在、私はベトナム南部のホーチミン市にある「KAIZEN 吉田スクール」という日本語学校で日本語教師をしています。このほど沖縄建設新聞様からお申し出をいただき、私もちょうど沖縄の方々へベトナムという国を知ってもらいたいと思っていたところでしたので、今月から「ベトナム通信」をお届けすることになりました。ベトナムの人々や社会、日本や沖縄に対する印象、ベトナムの建設業、在越日本人や沖縄人など、日々の暮らしを通して私が知ったベトナムをご紹介します。また、私が勤める日本語学校の

ベトナム生活のスタート切る

運営母体はESUHAJ Co.Ltd (エスハイ) という送出国関ですので、折に触れ、送出国関の仕組み、技能実習生の実情などもお届けできたらと思っています。気軽に楽しんで読んでいただくと幸いです。さて、私が新しい挑戦に胸をワクワクさせながら那覇空港を飛び立ったのは、2019年10月1日の朝でした。乗り継ぎの悪い台北経由便だったため、ホーチミンに着いた時はすでに現地時間の夜10時を回っていました。ベトナムと日本の時は差は2時間。日本時間では深夜0時になります。乗り継ぎさえスムーズに行けば、沖縄へホーチミンは6時間ほどで到着します。直行便がある羽田や関空などからでも6時

間弱で着くのに、距離的に近い沖縄から半日以上もかかったことに、割り切れないさを感じたもので、その分、運賃は安くなることが多いですが…。渡越当時、沖縄からホーチミンにLCCが直行便を飛ばすとの新聞記事もありましたが、その後のパンデミックでいまだに実現していません。東南アジアの大都市の例にもれず、ホーチミンもとてもエネルギーシユな街です。雨季も終わりに近づいた10月ですが、空港の建物を一歩外へ出ると、モアっとした高温多湿の空気が体を包みまします。本土から那覇空港へ戻ってくると、やはり南国の空気を感ずりますが、東南アジアの場合は沖縄よりもさらにジトっと、体にまとわりつく印象があります。

空港は深夜にもかかわらず、大きな荷物を持つ人や客待ちの車でごった返していました。タクシーのクラクションが鳴り響き、聞きなれない言葉がまるでケンカでもしているかのように飛び交います。迎えに来てくれたイケメンのベトナム人学生に連れられ、学校近くのホテルのベッドに倒れこんだ時は1時になっていました。そのホテルのベッドは小中学校の体育の授業で使用したマットのように硬く、身体はクタクタなのに、その硬さに加え、窓の外から聞こえる酒飲みの談笑の声、スピーカーから流れる物売りの声などで、よく寝られないまま朝を迎えることになったのです。早朝から働く人々の生活音や、はじめて聞く鳥の声を聞きながら、ああ、本当にベトナムに来てしまったんだと、寝ぼけた頭で考えていました。こうして私のベトナム生活がスタートしたのです。



本紙の出版事業部長などを務めた大城ひかる氏による「大城ひかるのベトナム通信」を今週号より連載開始します。ベトナムは日本国内に多数の技能実習生を送り出し、交流も拡大しています。ベトナムの国情など大城氏による現地レポートを掲載します。

【著者略歴】
石垣市出身。首里高校卒。大学進学とともに上京し、卒業後「通販新聞」「PCトレーダー」など業界紙誌で取材執筆編集に携わる。帰沖後、県内の印刷・広告代理店を経て沖縄建設新聞へ。2019年からホーチミンにて日本語教師。